

求古行書指針

306
85

1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4

始



求古行書指針

陸三藏聖教序



306
85



求
古
行
書
指
針

龍三藏聖教序



藏
聖
教

大
唐
三



弘
福
寺

皇
帝
黎

太
宗
女

房

王
榮
成
之

右
將
軍

二
集
音

沙
門
懷

頭
賓
載

儀
有
像

萬
問
二

書

暑
雨
化
行
時
四
山
令
生

晴
雨
寒
暖
空
五



皆識其地
謂是天鑑也

物是天鑑也

地涌思天鑑也

地涌思天鑑也

其
數
也

指
揮
軍
令

洞
陽
貫
陰

游
山
水

國
家
大
學

地
天
和
平
安
康

地而雜

寓乎天

也陰陽

其有像

像也其窮
顯叔安者
可叔祉

在
智
物

隨
自
觀

不
或
形

微
難
易

拉
寂
弘

虛
柔
幽

佛
道
崇

達
況
示

靈而空

方舉威

典御十

濟方歸

月 刃 下 大 而 差 上 柳 神

引 張 之 之 之 之

空
喊
空

於
萬
於

之
則
攝

守
宿
任

生處千

劫而不

古著隱顯

運百福而長

今妙道深玄

遵之算知其

際法流湛寂

挹之莫測其

源故知廢之

凡思至之肩

鄙叔其首趣

惟無疑或者

哉然則大教

之興甚乎西

主騰漢遯而

貳夢照東城

而流慈昔者

和形和跡之

時之來馳而

成化者亨現

之世民仰德

而知遵乃守

晦影歸真遷

儀越世金容

掩色石鏡三

千之光璧象

開面空瑞四

之相於是

激之廣被極

含類於三途

遺訓遵宣導

羣生於十地

然而真教難

仰慕能一其

自歸曲學易

遵耶云於焉

紅所山空

有三論或習

俗而是非大

小之乘乍以

時而陸替有

玄奘法師者

法門之領袖

也易懷貞敏

早悟三空之

心長契神情

先菴四忍之

行松風水月

東壁比其清

華仙露明珠

祚能方其朗

潤故以智通

無累神測東

形超六塵而

迥出塵千古
而無對凝心

由境悲亡法

之陵遲枯憲

玄門微深文

之記襟襟思致

弘條朴理廣

微前聞載仍

續真聞茲後學
是“翹心津玉

法遊西域乘危

遠邁杖筇孤征

積雪晨飛途間

失地驚砂夕起

空外迷天萬里

山川攢煙霞而

進景百重寒暑

躡霜雨而前蹤

誠重芳軒冰深

召達周遠西宇

十有七年窯磨

道邦徇私正教

雙林水味道

滄風鹿莞鷺岸

曉奇仰異承玉

主於先聖空空真

教於上賢探贊

妙門精亦與業

一乘五津之道

馳騁於心田

藏三篋之文波

濤於口海爰自

所厯之國招將

三藏要文凡六

百五十七部譯

布中夏宣揚勝

蒙引慈雲於西

極注法雨於東

垂聖教鼓而復
全蒼生罪而還

祐退火宅之乾
篤共拔迷途朗

受水之靈波同

臻彼岸是知忘

因紫陰至若以緣
昇墜之端惟
人所託譬夫桂
生高嶺雲竈方
詩詠其花連出
淵波飛塵不能
汙其葉非蓮性
自潔而桂質卉

貞良由所附者

高則微物不能

累所憑者淨則

謂類不能沾夫

“卉木無知猶

資善而成善沒

予人倫有識不

緣度而求厚方

冥茲經流施將
日月而無窮斯
福遊敷占輒肆
而永大
朕才謝珪璋之
整博達至極內
典尤所未聞昨
製序文深為鄙

拙唯恐穢箱墨

於金簡標凡牒

於珠林忽待來

書櫟承爽遺脩

躬捐寔弦益厚

願善不旦稱空

勞致謝

皇席在春官述

三藏

聖記

夫顯揚正教非

智無以廣其文

崇闡微之此貞

莫能定其旨蓋

真如聖教者諸

法之玄宗衆經

之軌躅也綜括
宏遠與旨遐深
極空有之精微
體生滅之機要
祠淺道曠尋之
者不究其源文
顯義幽履之者
莫測其際枚知

聖慈所被業無
善而不臻妙化
所敷緣無惡而
不剪開法網之
經紀弘六度之
正教極羣有之
達崇啓三藏之
祕局是「名無」

翼而長飛道無

根而永固道名

流度塵遂古而

鎮常赴感應身

經塵劫而不朽

眾鍾夕梵文二

音於鶩岸聽日

法流轉綴輪於

鹿莞排空寶蓋

揚羽雲而共飛

莊野春林占天

花而合衆化惟

皇帝陞上

玄賓福雲拱而

沾一毫德被黔

黎敘桓而翔萬

國恩加朽骨石
室歸見葉之文
澤及昆蟲全匱
流梵說之偈道
使阿耨達水通
神旬之川者
闍崛山搖萬華
之翠嶺窟之法

性凝寂靡歸心
而不通智地玄
與感慾誠而遂
顯豈謂重曆之
夜燭慧炬之光火空之
朝降法雨之澤於是百
川異流同會於海万
山義捨成乎實豈以湯
武技其優劣堯舜以其
聖德者哉玄奘法師者

夙懷取令立志夷蕡神
清鄙胤之年體拔浮華
之世凝情空室逼幽
巖窟栖息三禪巡遊十地
超六塵之境獨步迦維
會一乘之旨隨機化物
以中華之無質寄印度
真文遠涉恒河終期滿
字頻登雪嶺更縷半珠
向道法還十有七載備
通釋典利物為心以貞
觀十九年二月六日奉

勸於弘福寺翻譯聖教
要文凡六百五十五部
引大海之法流洗塵勞
而不竭傳智燈之長燄
照幽闇而恒明自非久
植勝緣何以顯揚斯旨
所謂法相常住齊三光
儀之固也見游釋衆經
論序照古騰今理含金
石互聲文挹風雲互潤
沾霖以經塵埃岳墜露

添流略舉大經以為斯

記

治素乏才學性不取敏
內典詣文殊未觀攬所
作論序鄙杜尤繁忽見
來書褒揚讚述接躬自
省慙悚立并勞師蒼遠
臻深以為愧

貞觀廿二年八月三日
內出

戊寅九月史臣詒

四四

王右軍聖教序解説

この聖教序は、僧の懷仁が王右軍の書を集字したものである。即ち王羲之の行書を最も廣く、最も多く萃められたものである。而かもその鈕刻頗る精緻を極め、よく羲之の形貌を傳へてゐる。興福寺断碑、蘭亭叙とともに、行書研究の規範といつても過言ではない。

石は三十行、行八十餘字、字數實に一千九百有二字、これだけ同大の文字を集字するには實に並々ならぬ苦心のあつた事を想像し得る。從つて中には、扁と旁とを組み合せたり、上部と下部を組み合せて、一字を形成したものも多數あることは注意して置かねばならぬ。又あるものは懷仁が、右軍の筆意にならつて書き足したものもあるといふ説もある位である。全體の脈絡、一個一個の文字については、幾分の批議はまぬがれないのは、集字の悲しさである。

碑首には頗る細緻な七佛像を刻してあるから又七佛聖教の名稱がある。原石は、紹興二年に断じたとも云ひ、或は、天順年間とも云ひ、或は嘉靖年間に断じたとも云はれてゐる。後世になつて、原石は断折したものである。未断本を以つて世に宋拓本と稱せられてゐる。碑中の糺紛の二字微かに裂紋あり、何以の二字略缺壞あり、内出々の字全泐すと雖も、其の下半稍形迹を見、其の餘は俱に完全なるものを以つて、宋拓本の上乘とされてゐる。聖慈々の字、右上角が未だ缺けず、第二十六行目の故字未損なるものは宋拓にして前者に次ぐものとなされてゐる。石已に断じ、三奥の文字未損、故字未だ全泐せざれば、明拓本である。最近の拓本は、五行目の被拯の二字、神清々の文字、第二十八行目の高陽縣の三字、末行の文林郎の三字皆磨泐してゐる。若し、以上の諸字がまだ盡く磨泐して居ないならば、清朝の初めの拓本である。

有名な帖であるだけ、翻刻本も頗る多く、一寸原拓と判別のつき兼ねるが如きものもある。而し又複刻甚だ粗略にして、全く真を失するものも頗る多い。研究者としては充分細別することが肝要である。今日世に重んぜらるる宋拓本には三者ある。

三井聰水閣の秘蔵になる天下第一本聖教序、崇禎墨寶人間第一本聖教序、博文堂より出版されてゐる宋拓聖教序これである。博文堂本と人間第一本とは類似の法帖で、磨泐稍多く、鋒芒が少し、明かではないが、多肉にして和潤、頗る古意に富み精采の多いものである。三井本は、頗る精拓にして、鋒芒瞭然として、雄勁の筆致のあらはれた法帖である。

本大觀に輯錄せるは、前者の人間第一本聖教序である。

王右軍大唐三藏聖教序釋文

太宗文皇帝製

弘福寺沙門懷仁集晉右將軍王羲之書

蓋聞二義(日月)有象顯覆載(天地以含生四時無形潛寒暑以化物是以窮天鑒地庸愚皆識其端明陰洞陽(通の假賢哲罕(希の假)窮其數然而天地苞乎陰陽而易誠者以其有象也陰陽處乎天地而難窮者以其無形也故知象顯可徵雖愚不惑形潛莫觀在智猶迷況乎道崇虛乘幽控寂弘濟萬品興御十方舉威靈而無上仰神力而無下大之則彌於宇宙細之則攝於毫釐無滅無生歷千劫而不古若隱若顯運百福而長今妙道凝玄造之莫知其際法流湛寂挹之莫測其源故知蠢々凡愚區々庸鄙授其旨趣能無疑惑者哉然則大教之興基乎西土騰漢庭而皎夢照東域而流慈昔者分形分蹟之時言未馳成化當常現常之世人民の字を人に作る仰德而知遠及乎晦影歸真遷儀越世金容掩色不鏡三千之光麗象開圖空端四八之相於是微言廣被括含類於三途遺訓遐宣導羣生於十地然而真教難仰莫能一其指歸曲學易違邪正於焉紛糾所以空有之論或習俗而是非大小之乘乍沿時而隆替有玄奘法師者法門之領袖也幼懷貞敏早悟三空之心長契神情先苞四忍之行松風水月未足比其清華仙露明珠詎能方其朗潤故以智通無累神測未形超六塵而迥出隻千古而無對凝心內境悲正法之陵遲栖慮玄門慨深文之訛謬思欲分條析理廣彼前聞裁僞續真開茲後學是以翹心淨土往遊西域乘危遠邇杖策孤征積雪晨飛塗間失地驚砂夕起空外迷天萬里山川接煙霞而進影百重寒暑躡霜雨而前蹤誠重勞輕求深願達周遊西宇十有七年窮歷道邦詢求正教雙林八水味道食風鹿苑鷺峯瞻奇仰異承至言於先聖受真教於上賢探蹟妙門精窮奧業一乘五律之道馳驛於心田八藏三箇之文波濤於口海爰自所歷之邦惣將三藏要文凡六百五十七部譯布中夏宣揚勝業引慈雲於西極注法雨於東垂陲墻也同じ聖教缺而復全蒼生罪而還福溫火宅之乾餧共拔迷途朝愛水之昏波同臻彼岸是知惡因業墮善以緣昇昇墜之端惟人所託譬夫桂生高嶺雲露方得凌其花蓮出綠波飛塵不能汚其葉非蓮性自潔而桂質本貞良由所附者高則微物不能累所憑者淨則濁類不能霑夫以卉木無知猶資善而成善况乎人倫有識不穢慶而求慶

方冀茲經流施將日月而無窮斯福遐敷與乾坤而永大

朕才謝讓の假珪璋言慙博達至於內典佛教尤所未闇(習)昨製序文深爲鄙拙唯恐穢翰墨於金簡標瓦礫於珠林忽得來書謬承褒讚循躬省慮彌益厚顏善不足稱空勞致謝

皇帝在春宮述三藏

聖記

夫顯揚正教非智無以廣其文崇闡微言非賢莫能定其旨蓋真如聖教者諸法之玄宗衆經之軌躅也綜括宏遠奧旨遐深極空有之精微體生滅之機要詞茂道曠尋之者不究其源文顯義幽理治を諱みて理となす之者莫測其際故智聖慈所被業無善而不臻妙化所敷緣無惡而不窮剪と同じ開法網之綱紀弘六度之正教拯羣有之塗炭啓三藏秘扃是以名無翼而長飛道無根而永固道名流慶歷遂古而鎮常赴感應身經塵劫而不朽晨鍾夕梵交二音於驚峯慧日法流轉雙輪於鹿苑排空寶蓋接翔雲而共飛莊野春林與天地而合彩伏惟皇帝陛下上資玄福垂拱而治八荒德被黔黎歛衽而朝萬國恩加朽骨石室歸貝葉之文澤及昆蟲金匱流梵說之偈遂使阿耨達水通神甸之八川者闍緜山接嵩華之翠嶺竊以法性凝寂靡歸心而不通智地玄奧感懶誠而遂顯豈謂重昏之夜燭慧炬之光火宅之朝降法雨之律於是百川異流同會於海萬區分義惣成乎實豈與湯武校其優劣堯舜比其聖德者哉玄奘法師者夙慎聽令立法夷簡神清詔亂之年體援浮華之世凝精定室匿跡幽巖栖息三禪巡遊十地超六塵之境獨步伽羅會一乘之旨隨機化物以中華之無質尋印度之真文遠涉恒河終期滿宇頻登雪嶺更獲半珠問道往還十有七載備通釋典利物爲心以貞觀十九年二月六日奉勅於弘福寺翻譯聖教要文凡六百五十七部引大海之法流洗塵勞而不竭傳智燈之長燭皎幽晉而恒明白非久植勝緣何以顯揚斯旨所謂法相當住齊三光之明我皇福臻同二儀之固伏見御製集經論序照古騰今理含金石之聲文抱風雲之潤治高宗の名輒以輕塵足懶墜露添流畧舉大綱以爲斯記唐高宗殘荅

治高宗の諱素蕪才學情不聽敏內典諸文珠未觀覽覽の假所作論序鄙拙尤繁忽見來書褒揚讚述撫躬自省懶悚交并勞師等遠臻深以爲愧

貞觀廿二年八月三日內出



有所權版

昭和十三年十二月五日印刷 求古行書指針
昭和十三年十二月十日發行 定價金貳圓

寧樂書道會長 辻本史邑先生監修
書者 辻本史邑 印刷所 日本版畫印刷合資會社
大阪市南區東清水町二九
大潤善吉 發行所 駿々堂書店
大阪市南區東清水町二九

寧樂書道會長 辻本史邑先生監修

昭和 新選 碑法帖大觀

既刊三十四冊

各冊三十三頁五、横十九頁

オフセラト印刷「唐本」仕立

定價各一圓三十錢
郵送料各九錢

發行趣旨

所である。

然るにこれが名碑法帖を選擇入手することは頗る困難である。本會は早くより此の點に着目し之が刊行を見るならば、普く同好の士を益すること甚だならんと、こゝに本書刊行の意を決し、營利を度外視して一切の犠牲を拂ひ、最も精選されたる基本的碑法帖百種を精印して「昭和新選碑法帖大觀」と題し昭和九年本會長辻本史邑監修のもとに着々計畫を進め、翌十年二月、其の第一巻の刊行を見る、爾來卷を重ねること三十四、其の真價愈々あらはれ、今や絶賛の嵐を呼びつゝあり、乞ふ！ 書道愛好の士は、ぜひ机上一本を備へられんことを!!

第一輯

自一卷 至十二卷 全卷完結・各卷左の通り

第一卷 九成宮醴泉銘（楷）海内第一と稱せられる唐拓本を精印す。

第二卷 興福寺斷碑（行）山本寛山翁筆の唐拓本を精印す。

第三卷 漢張金界本蘭亭（秋碧堂本）
第四卷 孟枯法師碑賦（楷）臨川四寶の一つとして海内孤本を精印す。

第五卷 王右軍草書帖（草）精選精印す。集帖中に列されたる右軍の草書中、代表的のもの即ち淳化、澄清、餘清、快雲堂、廣賞堂の諸帖より

第六卷 石鼓文附吳昌碩石鼓文（篆）宋拓本を以て精印す。

第七卷 王右軍聖教序（行書）人間第一本として、聖教序中の最上のもの。

第八卷 孔子廟碑（楷）臨川四寶の一つとして海外孤本と稱せられるもの。

第九卷 智永真草千字文（草）呂氏真草千字文の寫真により精印す。

第十卷 新出土六朝墓誌三種（碑書）本部所蔵の新出土六朝墓誌の優秀なもの三種。

第十一卷 洛神賦二種（行）南唐後主の精印したもの。洛神賦を精印したものが王羲之洛神賦と秋思堂中に精刻された趙松雪

第十二卷 李懷琳絕交書（草書）本部所蔵の李懷琳の本別より精印す。

第二輯

自一卷至十二卷 全卷完結・各卷左記

第一卷 隋蘇孝慈墓誌銘（楷）筆力雄勁筋肉堅挺、細緻纖細の運営である。本部所蔵の初拓本より精印す。

第二卷 趙子昂蘭亭十三跋（草）數多ある子昂行書中の正高である。快寫書帖と良識殘簡を併せ載録して墨書者の便に貰せんとする精印す。

第三卷 孫過庭書譜上巻（草）京書研究の最高模範としての書譜の價值は今更申すまでもない。山本寛山先生舊藏の墨拓本より精印す。

第四卷 孫過庭書譜下巻（草）全前

第五卷 虞恭公碑附全墓誌銘（楷）虞恭公碑は歴史家八十一歳最も晚年の書翰にて宇文平生書法模範の亟焉である。然るに今日恰好に公品にて細密模範に絶妙の資料である。精印するにせり。今墨拓本はこれ又書て世に公卿されざる珍

第六卷 靈飛經（楷）本より精印す。此は虞恭公の行書で現代書道に如何に偉大なる影響を及ぼせるかは今更言を俟たぬ所である。靈飛經の精妙、細緻の構成なる點飛經に及ぶものはなからず。靈飛經の初拓

第七卷 漢曹全碑（楷）此は漢書の行書で現代書道に如何に偉大なる影響を及ぼせるかは今更言を俟たぬ所である。靈飛經の精妙、細緻の構成なる點飛經に及ぶものはなからず。靈飛經の初拓

第八卷 祭姪爭坐位二稿合冊（行）二稿は陳氏行書中の代表作である。祭姪争坐位より爭坐位を覽山翁画譜中のものより精印す。祭姪争坐位

第九卷 道因法師碑（楷）歐陽詢の楷書研究の絶好標範である。然るに今日の講の公刊を見ず。ここに覽山翁画譜の精拓本より精印して次第に精印す。

第十卷 黃庭經四種合冊（楷）此は歐陽詢の代表標範である。詒旨本、實音本、愚池堂藏本の三種を、子昂の墨拓本を合せて精印す。

第十一卷 懷素千金帖聖母帖合冊（草書）中唐草書大家としての懷素の地位は今更言を要せぬ所、千金帖は停雲齋木刻より聖母帖は本部所蔵

第十二卷 雁塔聖教序（楷）褚遂良楷書中の鉅品である。本部所蔵の墨拓本より精印す。

第三輯

自一卷至十二卷 既刊十冊・以下續刊

- 第一卷 皇甫府君之碑（楷）歐書の中の最も峻拔を誇る行書精法研究家の絶好標範たるは昔を俟たず、第一稿の九成宮、第二稿の虞
- 第二卷 賀知章孝經（草）歐書の精妙なる點は他に求め得ず。實に北魏精法の標範なり。齊書研究の第一稿の孝經は支那に於ても甚多くあるが、元末賀知章の筆致は支那に於ても甚多くある。歐書の精妙なる點は實に漢書の正統なり。第一稿の孝經は用筆に餘り、第二稿の孝經は筆致に餘り、第三稿の孝經は筆致に餘り、第四稿の孝經は筆致に餘り、第五稿の孝經は筆致に餘り、第六稿の孝經は筆致に餘り、第七稿の孝經は筆致に餘り、第八稿の孝經は筆致に餘り、第九稿の孝經は筆致に餘り、第十稿の孝經は筆致に餘り、第十一稿の孝經は筆致に餘り、第十二稿の孝經は筆致に餘り、
- 第十卷 鄭文公下碑上巻（楷）歐文公碑は北魏六朝精法の標範なり。齊書研究の標範も亦この再より出づ。
- 第十一卷 歐虞行草書定（楷）歐虞行草書定は行草書研究の標範なり。齊書研究の標範も亦この再より出づ。
- 第十二卷 未

發 行 所

大阪市南區東清水町二十九
殿々堂内寧樂書道會

書 店



現出の文字千の好愛家研究道書

辻本史邑先生書 (美濃版和絵表紙精行・草三冊組入)

定価 金六圓 豪料金三十錢

本書は書道研究家の爲に豪華版として出版せるもので書道研究家に
なくてはならぬ名著である。

辻本史邑先生書 (美濃版和絵表紙精入一冊)

定価金二圓十五錢 豪料金十四錢

本書は書道研究家の爲特に豪華版の精書籍を分冊として使用者の
便を圖りて出版せるものである。

辻本史邑先生書 (美濃版和絵表紙精入)

定価金二圓十五錢 豪料金十四錢

本書は書道研究家の爲特に豪華版として出版せるもので使用者の
便を圖りて出版せるものである。

辻本史邑先生書 (美濃版和絵表紙精入)

定価金二圓十五錢 豪料金十四錢

三體千字文 豪華版

三體千字文 普及版

楷書千字文 豪華版

楷書千字文 豪華版

篆書千字文 豪華版

篆書千字文 豪華版

草書千字文 豪華版

草書千字文 豪華版

行書千字文 豪華版

行書千字文 豪華版

隸書千字文 豪華版

隸書千字文 豪華版

店書堂々暖 所行發 九二町水済東南市阪大
番五三〇一號大庭口書院

終

